コンラッドとラフカディオ・ハーン
——燐光を発する海で——

設 楽 靖 子

Abstract Even in the Lafcadio Hearn studies flourishing in Japan, there have not been attempts to discuss this writer of Meiji Japan in connection with his contemporary, the proto-Modernist, Polish-born Joseph Conrad. Certainly, well-established biographical studies of each writer prove that there was no direct contact between the two; however, this paper intends to explore some justifications for putting Hearn and Conrad together and consider whether such a juxtaposition could make any contribution to Conrad studies or to Hearn studies. After tracing some features of contemporariness of the two writers, I will present a chronology which shows that Hearn had entered Conrad's field of vision by 1911-12, when two of the earliest Hearn studies were published by Conrad's acquaintances, Edward Thomas and Joseph de Smet. An attempt will be made to explore any possible echoes between the texts of these two writers, who sought their first-hand experiences in the East during this early period and chose to present them, in different genres, to mainstream English readers.

2010 年は、ラフカディオ・ハーンの生誕 160 年、来日 120 年にあたる。日本におけるハーン研究の高まりには幾つかのピークとなる契機があったようであるが、20 年前のハーン来日 100 周年もその一つとなったようで、その後に刊行された『小泉八雲事典』(2000) の充実した構成・内容は研究の蓄積を伝えている。また、近年に刊行された『講座 小泉八雲 I, II』(2009) は、その研究成果をさらに進展させたものであろう。この 2 巻本には、「ハーンとブラム・ストーカー」や「ハーンと中島敦」といった章があることから窺えるように、以前にはハーンと組み合わせて論じられることのなかった同時代作家への関心の広がりが見て取れる。ここで「ハーンとコンラッド」という組み合わせを仮定することが、コンラッド理解に（あるいは

ハーン理解に）何がしかの寄与があり得るかどうか、コンラッド研究の側から検討してみたい。

まず前提として、ハーン (1850-1904) とコンラッド (1857-1924) は、生没年を見る限り、ほぼ同時代人と言えるが、それぞれの伝記研究が出揃った現在、二人の間に直接の接触はなかったと断言できる。ただし、コンラッド研究の側からは、コンラッドがハーンの生涯と作品に関心を寄せていたことを示す事実がある。一方、ハーンがコンラッドを読んでいたという記録は今のところ皆無であろう。したがって、この二者の関係にアプローチする場合、もし影響関係があり得るとすれば、それはコンラッドのテクストにハーンの影響があるかどうかという問いであって、その逆の可能性はない、と仮定する。

本稿は、この前提に立ち、まず、この二人の作家の伝記的対応と同時代性を辿る。その上で、コンラッドの視野にハーンが入ったのは、遅くとも 1911-12 年であることを示す。そして、コンラッドとハーンのあいだにいかなる影響関係があるかを探るよりも、19 世紀後半、ヨーロッパの周縁を出身とする 2 人の人物が、それぞれに数奇な人生をたどる中、英語で表象されることの少なかった遠隔地へ出向くことを選び、そこでの直接体験を英語文学へと持ち返った、そのテクスト中に何らかの共鳴関係がないかを探ってみたい。

ハーンとコンラッドの伝記的対応と同時代性

コンラッドの生涯を特徴づける「３つの生涯」は、(1) 出身国ポーランドでの青年期まで (1857-74)、(2) フランス船とイギリス船での船員生活 (1874-95)、(3) イギリスでの作家生活 (1895-1924) に分けられる。ハーンの生涯の場合も、同様に３つの場所・時期に区分される。(1) ギリシャで生まれてアイルランドに移り、アメリカに渡るまでの時期 (1850-69)、(2) アメリカで文筆活動を始めた時期 (1869-90)、(3) 日本に居を定めて執筆活動を続けた時期 (1890-1904) である。日本での 14 年間は、松江 (1890-91)、熊本 (1891-94)、東京 (1896-1904) という３つの都市と結びつけて特徴づけられる。

ハーンはコンラッドよりも７歳年長という年齢差しかないが、1904 年に 54 歳で急逝したため、「19 世紀末の作家」として、また日本国内の時代区

分に即して「明治日本の書き手」として位置づけられる。一方、コンラッドの作家としての活動時期はヴィクトリア朝末期からエドワード朝、第一次大戦後にわたっており、「モダニズムの先行者」「20 世紀の作家」とみなされるので、両者の間には年齢差以上の年代的な開きがあるかにみえる。

両者の生涯を比較してまず気づく共通点は、生い立ちの不幸・不運である。ただし、コンラッドの場合、両親を早くに亡くしたとはいえ、父親はポーランド独立運動への献身者として社会的に顕彰されていたうえ、物心両面で支えた親族がいて、相続する財産も帰郷する場所もあったのに対し、ギリシア駐屯のイギリス軍士官と地元女性との結婚とその破綻という不運を背負ったハーンの生い立ちは、より孤独感の強いものであったろう。二人とも、それぞれの逆境を振り払うかのように、可能な方法を探って、「地図上の（ないしは文学表象上の）空白部分」へと出向いた。

二人の生涯を年表で比べてみると、いくつかの符合が読み取れる。一つは、カリブ海のマルティニーク島での滞在である。ハーンは 1887-89 年にアメリカの有力出版社ハーパー社との契約で滞在拠点とし、その滞在記の成果ゆえに同社との契約で日本行きへの道筋ができた。コンラッドはその 10 年前の 1874 年、18 歳のときフランス船での初めての遠洋航海に見習いとして乗船し、7 週間寄港していた。

仏領西インド諸島にすれ違いの接点があったことが暗示するように、両者ともフランス語が第一外国語であったことも重要な共通点であろう。ハーンがアメリカで文筆業を始めたとき、ゴーティエやモーパッサンの短編を英訳して雑誌に掲載する仕事が生活を支えた。コンラッドは、19 世紀フランス文学を愛読し、とくに初期の作品においてフローベルとモーパッサンの影響が見られることは自他ともに認めるところである。

年表に立ち返ると、1890 年という年がそれぞれに決定的な意味を持ったことが注目される。ハーンが日本に到着し、そこを自分のフィールドと認識した 1890 年、コンラッドはコンゴ河に赴いていた。より細かく見れば、ハーンが「神々の国の首都」松江に到着したのは 8 月 30 日、コンラッドがコンゴ河を 2 ヶ月かけて遡行して最上流部の Stanley Falls に到着したのがその翌日にあたる。双方とも自身の作家活動の支柱となる題材に行き着いたのは、地球上から「空白地帯」が消滅していたかのような 1890 年の夏であった。

もう一つの年表的対応は、ハーンが日本発の第 1 作 *Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894) を刊行した年と、コンラッドが *Almayer's Folly* (1895) をもって文壇デビューした年とがほぼ一致していることである。ハーンは、これ以降、急逝する 1904 年まで、毎年 1 冊という確実なペースで日本から英語圏へ向けて 12 点の著書を送り続けており、1894-95 年から約 10 年間、両者は作品を発表していた時期が一致する同時代作家であった。

作品の出版年が 10 年間一致していたということは、互いの著作を目にする機会がなくても、その書評がメディアに相前後して取り上げられていたという意味でもある。その「共存」状態を書評・紹介記事から辿ってみる。[1] まず、当時の代表的な週刊の批評誌 *Athenaeum* をみると、上記のハーンの第 1 作は 1894 年 10 月 11 日号において詳細かつ絶賛の書評で紹介されており、ハーンは、このとき、「知られざる日本」について「表面下に隠れた内面」を伝え得る書き手としてイギリスの文壇に登場する。この *Athenaeum* 誌はハーンに注目したのであろう。第 2 作 *Out of the East* (1895) が刊行されるとすぐに 1895 年 8 月 24 日号で、第 3 作 *Kokoro* (1896) も同様に 1896 年 8 月 8 日号で、第 4 作 *Gleanings in Buddha-Fields* (1897) も 1897 年 11 月 13 日号で、継続して紹介されている。第 7 作 *Shadowings* (1900) についても 1901 年 1 月 5 日号で取り上げられているが、絶賛のトーンは次第に弱まり、"these stories . . . have lost their chief and real advantage—their local colour" と評されている。この時系列にコンラッド作品の紹介・書評を組み入れていくと、1895 年 5 月 25 日号には *Almayer's Folly* を「ボルネオの知られざる風景」を書き込んだ小説として、1896 年 7 月 18 日号には *An Outcast of the Islands* (1895) を "this vivid story of the Malay Archipelago" として、1902 年 11 月 20 日には短篇集 *Youth* を "exquisite and very subtle art" として紹介する記事を載せており、これらがハーン関連記事と相前後して登場することがわかる。

その「共存」状態は、別の週刊批評誌 *The Academy* においても同様である。ハーンの第 4 作 *Gleanings in Buddha-Fields* (1897) についての書評が 1897 年 11 月に出てまもなく、翌年 1 月にはコンラッドの *The Nigger of the "Narcissus"* が巻頭で取り上げられる。1900 年 11 月に *Lord Jim* の書評が出た半年後、1901 年 4 月には "Koizumi Yakumo – Lafcadio Hearn" と題され

た長文の記事が載り、「かつて東洋の仮面劇の目撃者であったハーンは、今や日本人となり、東洋哲学の霧の向こうへ隠された」と紹介されている。この記事の半年後、1901年9月には*The Bookman*誌が"The New Writer: Joseph Conrad"と題する記事を載せており、短篇集*Youth*("Heart of Darkness"を含む)が出て注目を集める新進作家について、その出身国にまで遡って略歴を紹介している。

つまり、1894/95年にロンドンの文壇に登場して以来、両者はそれぞれ「日本の解説者」「マレー群島のキプリング」[2]として紹介され、特定の地域と結びついた書き手として認識されてきたが、1901年時点では、ハーンはイギリスの一般読者からやや遠ざかっていく一方、コンラッドはそれまで一般読者には霧の向こうにあったプロフィールが明らかにされ、作家としての輪郭が見え始めていたといえよう。

極東にいたハーンがどの程度こうした文壇情報に接していたか、筆者は未確認であるが、ハーンの視野にコンラッドが入る可能性よりも、コンラッドの視野にハーンが入る可能性の方が高かったろうと想像される。ただし、イギリスで「東洋哲学の霧の向こうに隠された」と評された1901年頃、ハーンは帝国大学で英文学講師の職にあった。1900年9月～1903年3月に講じられた「英文学史」の講義録の中、ほぼ最終章の「Victorian Fiction」に注目すると、ここでハーンはR. L. スティーヴンソンとキプリングの紹介に多くの頁をあてているが、その記述からは、ハーンは努めてロンドンの文壇情報などに接していた様子が窺える。中でも「現代作家」であるキプリングを、特に短篇に優れた書き手として紹介し、Victorian fictionの系譜の最後に小説*Kim* (1901) を置いている (vol. 2, 795-809)。こうした最新刊の小説への言及があることから、ハーンの視野にコンラッドが入っていても不思議はないと考えるが、もし入っていたのであれば、ハーンはVictorian fictionをキプリングで完結させることを選んだ、と想像することもできよう。

いずれにせよ、イギリス文壇における読者にとっての両者の「共存」状態は、ハーンの没後も続く。*The Fortnightly Review*誌は日露戦争に合わせて1905年7月1日号の巻頭にコンラッドのエッセイ"Autocracy and War"を載せるが、その1年後の1906年10月1日号からG. M. Gouldによる伝

記的エッセイ "Lafcadio Hearn" を連載する。また、ロンドンの *The Times* 紙 1912 年 2 月 16 日付には、ニーナ・ケナードによる新ハーン伝 *Lafcadio Hearn: His Life and Work* の広告文が載るが、それと組み合わせて広告されている 1 点はコンラッドの自伝 *Some Reminiscences* (1912)である。

ハーン関連文献にコンラッドの名前は見あたらないが、コンラッドの側からはハーンの生涯と作品に関心を寄せていたことを明確に示すエピソードが一つある (Okuda 1998)。コンラッドの晩年にあたる 1922 年 9 月、自宅を 1 人の日本人が訪問する。この早稲田大学の日高只一教授が残した「コンラッド訪問記」によれば、日高はコンラッドとの会話の中で、「ラフカディオ・ハーンさんの作をお読みになったことはありますか？」という質問をする。それに対するコンラッドの答は、「ええ、二三読みました、『こころ』や『東洋から』などを。非常に面白く感じました。それに刺激を得て、機会があれば日本に行って見たいと幾度思ったか知れません」(日高 195)。しばらくして散歩に出たとき、今度はコンラッドのほうからハーンの話を切り出し、会話は以下のように続く (ibid., 197; 旧字体は変更)。

C：「ラフカディオ・ハーン氏の妻君は日本人だと聞いていますが事実でか」
H：「はい、日本婦人です。私の宅の直き近くに住んでおられます」
C：「君はハーン氏を知っていますか」
H：「ええ、知っていますとも、私等の英文学の先生でした」
C：「ハーンさんの遺児は幾人ありますか」
H：「確か 4 人と思います、御二男はハーン氏の長男によく似ておられます」

日高はコンラッドと面識のあった唯一の日本人研究者であろうが、偶然にもハーンの直接の教え子の 1 人であった。ハーンは帝国大学に 6 年半在職した 1904 年に辞職を余儀なくされるが、そのとき早稲田大学に破格の待遇で迎えられる。そのとき招聘運動をした学生の一人が日高であった (関田 77-80)。早稲田大学で教鞭を取り始めて 6 ヶ月でハーンは急逝しており、実際に受講した学生は限られている。その意味で、日高は、期せずして、コンラッドとハーンとの間を糸でつなぐ最適任の人物であったといえる。

1922 年にこの糸が繋がる以前、コンラッドはいつ、どのようにハーンを読む機会を持ったのであろうか。その答は、1911 年と 1912 年にフランスとイギリスで相次いで刊行された 2 点のハーン研究書であると考える。最も早い時期のハーン論として刊行されたこの 2 点の著者それぞれが、コンラッドと直接関係しているからである。

エドワード・トマスによるハーン論（1912年）

コンラッドがハーンをどう読んでいたかを問うとき、最も注目すべき 1 冊は、イギリスの詩人で優れた評論や伝記を書いたエドワード・トマス (1878-1917) による *Lafcadio Hearn* (London: Constable; Boston: Houghton Mifflin, 1912) である。この約 90 頁の小伝は、約 3 分の 1 を伝記的紹介に、約 4 分の 1 を日本以前の著作について、残りを日本関連の著作に割り当ててハーン文学の変容を辿ったもので、短いながらも「最も早い評伝」(森 129) として今でも評価が高い。特に、この小伝が執筆された 1912 年時点で参照可能だったハーン関連書が限られていたことを考えれば、先行研究に頼らず、ハーンの全作品を読み込んだ上での独自の評論であったことが窺える。つまり、トマスが参照・引用し得た文献は、Elizabeth Bisland 著 *Lafcadio Hearn: Life and Letters* (1906) など、ハーンを直接知るアメリカ時代の知人らが作家の死後に相次いで刊行した回想録 3 点と、Yone Noguchi 著 *Lafcadio Hearn in Japan* (1910) と日本研究の古典 Basil Hall Chamberlain 著 *Things Japanese* (1890) のみである。ハーンの文学論などを伝える帝大での講義録などが刊行されるのは 1920 年代、標準的伝記 (Elizabeth Stevenson, *Lafcadio Hearn: A Biography*) の刊行は 1962 年になってである。

エドワード・トマスは、コンラッドとの関係で言えば、オックスフォード卒業後、書評や評論の執筆を開始していた 1910 年 10 月、エドワード・ガーネットらが中心となったロンドンの定期昼食会でコンラッドと知り合う。以来、ケントでの双方の家が近かったこともあり、互いに行き来が続く。その後、第一次大戦に出征したトマスは、1916 年のクリスマス休暇で一時帰国した際、限られた時間を割いてコンラッド宅に 1 泊していることから、その親密な関係が窺える（トマスは翌年戦死することになる）。

トマスの批評家としての業績、およびその一環としてのこのハーン論に

ついては、まとまった先行研究がある（飯田 1990）。トマスのハーン論を一言で特徴づけると、「文体への強い関心」(ibid.,154) である。トマスによれば、ハーンのアメリカ時代は「熱狂的な装飾と、雄弁、あるいは必要以上に凝った言葉の使用」が目立つ文章だったのが、日本についての書き手となってからは、「新奇なるもの、それまで英語で書かれていなかったものを書く」という目的ゆえに、「雄弁が抑えられ」、その結果、「明晰に、的確に、淀みなく」書かれるようになった（Thomas, 59; 飯田 43）。こうして、「ハーンのアイデンティティの確立とその表現方法の確立を並列におき、その成長を辿っている」（飯田 157）、その点にこの評伝の第一の意義がある。

トマスによるこのハーン論をコンラッドが読まなかったとは考えにくい。一方、トマスはこの評伝を書くにあたって、物理的に近い所にいるコンラッドを意識していたかどうか、定かではない。むしろ、そうした連想を排除したところで、ハーンをハーンたらしめている功績、たとえば *Kwaidan* (1903) の再話が「遠く離れた言語からの翻訳であることを暗示するものは微塵もなく」、「見知らぬ外国の地で翻訳者によって見いだされた最大の宝の一つである」(77-78; 飯田 59) といった評価を導き出すことに集中している。ただ、「ハーンが日本人の軍事能力がどのように得られたのかを西洋人の眼に ("to Western eyes") 示すとき」(85) という表現を使っている箇所では、コンラッドの前年の小説タイトル (*Under Western Eyes*, 1911) が脳裏をよぎっていたかもしれない。

ジョゼフ・ド・スメによるハーン論（1911年）

上述のエドワード・トマスのハーン論をコンラッドが読んだという確証はないが、その前年にフランスで出版されたフランス語によるハーン論をコンラッドが一読したことは自身の手紙から確実である。それはコンラッドの書簡集の中、1 ヶ所だけハーンの名前が出る 1911 年 11 月 30 日付け、Abbe Joseph de Smet なるベルギー人カトリック神父・視学監に宛てた手紙においてである (*CL* 4, 518)。コンラッドがスメに宛てた手紙数通からは、この時期、スメがコンラッドの短編 "Typhoon" のフランス語訳を準備中で、コンラッドはその校正刷りを預かって海洋用語を中心に点検中であったことがわかる。その最中、スメはコンラッドに自身の新刊書を献本する。コ

ンラッドは上記の手紙で、"Typhoon" のフランス語訳に満足の意を伝えた後、スメの著書について以下のように礼状を書いている。

> Your book about Hearn delighted me greatly by *its appreciative tone* and *its sympathetic view* of that remarkably fine nature. It is in every way worthy of its subject and I beg to congratulate you on your achievement. Many thanks for the copy, which I shall prize greatly. (*CL* 4, 518; 強調を追加、以下同様)

このときの "your book about Hearn" が何であるか、ケンブリッジ版書簡集に注記はないが、著者が Smet であれば *Lafcadio Hearn: l'homme et l'oeuvre* (1911) を指すと簡単に特定できる。ハードカバーで250頁を越えるこの単行本は、ハーン作品がすべてフランス語に訳されていたわけではなく、またエドワード・トマスの場合と同様、参照できる文献は数点の回想録に限られていたこの時期、ハーンの生涯と作品をフランス語圏の読者に向けて紹介することを意図した労作であり、1巻にまとめられたフランス語によるハーンの伝記・研究書としては、長らくこの1冊のみであった（スメ 232; 訳者あとがき）。

コンラッドがスメへの礼状で「ハーンに共感的なあなたの書き方と視点」に言及しているように、スメの文章はハーンの生涯と作品に情緒的ともいえる共感を寄せたもので、特にピエール・ロティを引き合いに出して、日本を「奇妙で滑稽な物の展示された博物館」としか見ず、「優越民族の諸権利というきわめて高慢な考えを抱いていた」と評し（スメ 116）、それとは対照的な態度をもっていたのがハーンであるという立場を明言している。

このスメがコンラッドの "Typhoon" を訳し、その後 1912 年に *Nostromo* のフランス語訳に取り組んでいるということは (*CL* 4, 406)、スメはコンラッドの作品中に、「ロティにはなくて、ハーンにあったもの」を見ていたことに他ならない。

以上、エドワード・トマスとスメによる2点のハーン論を簡略に見てみたが、どちらもハーン研究のその後の展開によって補充・修正されるべき点があるにしても、「ハーンの死後まもない当時のイギリスとフランスにおけるハーンの評価を知ることができるという同時代性」において貴重な2冊といえる。コンラッドは、その2冊の著者それぞれと、個人的に親しく、

また職業上の共感をもって繋がっていた。コンラッドが日高に「ハーンさんを読んで非常に面白く感じました」と答えた背景には、その 10 年前の 1911-12 年、まだハーン研究が緒に就いたばかりの時期に、コンラッドはその評価を試みる書き手たちの至近距離にいたという事実も関わっていたのである。

「燐光を発する海」のイマジェリー

コンラッドは遅くとも 1911 年までにはハーンの作品を知っていたこと、ハーンの生涯と作品に最大級の共感を示したスメの文章に接していたことを見てきたが、ならばコンラッド自身のテクストにその具体的な影響関係を見出すことができるかどうか。可能性がないと言い切る理由はないが、今その問いを立てるよりも、この二人の作家のテクスト中に共通して表出するイメージを一つ抽出し、共鳴の有り様を探ってみたい。ここでは、コンラッドの短編 "The Secret Sharer"「秘密の共有者」(初出は *Harper's Magazine*, 1910)[3] と、ハーンの随想 "At Yaidzu"「焼津にて」 (*In Ghostly Japan* [1899] 所収) を並置し、それぞれのテクスト中で鍵となっている「海の燐光 phosphorescent」に注目してみる。前者ではシャム湾の凪の中、後者では焼津の浜での灯篭流しの中で、その場面は現れる。

コンラッドの "The Secret Sharer" は、自身が船長として乗務したシャム湾での経験を題材にしていることから、物語年代は 1888 年頃とみて矛盾はない。物語の冒頭、船長である「私」が夜の当直に立っていると船の縄梯子の下で「人間の裸の体から突然発したようなかすかな燐光 (in a faint flash of *phosphorescent* light) が、まるで夜空に稲妻が音もなく束の間のひらめきを見せるように、眠っている水面でちかちかと光った」。目をこらすと、「二本の長い脚と、緑がかった気味の悪い淡い光の中に首まで浸っている背中とが見えてきた」(9; 訳 82)。縄梯子から船に上がってきた男は、近くに停泊する船から逃れてきた経緯を説明し、船長である私の "secret sharer" として数日間を船長室に潜んだ後、逃亡を続けるため船外へ逃れ去る。物語の末尾、それを見守る私は、彼に前もって渡していた白い帽子が黒い水面に浮かぶのを確認し、「ちかちかする燐光がその下を通り過ぎた(A *phosphorescent* flash passed under it) . . . 私のぺらぺらの帽子とわかった。きっと彼

の頭から落ちたに違いない」と理解する (142; 訳 136)。つまり、この物語の冒頭と末尾で、私の "secret sharer" は「燐光」とともに海の中から現われ、「燐光」とともに海へ去っていく。

一方、ハーンの「焼津にて」は、1896 年に東京に居を定めたハーンがその後の毎夏を過ごした焼津での風景と体験と思索を記した原文約 15 頁の随想である。4 部から成り、第 1 部は焼津の風景描写、第 2 部は盆行事の描写、瞑想が深まっていく第 3 ～ 4 部は「散文詩のような格調」を持ち、「ハーン文学の一つの頂点」(森 89-90) とも評される。ハーンの心象風景と結びついた第一の町が山陰の日本海に面した松江であれば、第二の町は駿河湾越しに富士山が浮かぶ焼津の漁村であった (村松 1994)。1899 年、焼津で過ごす２度目の夏、横浜の友人ミッチェル・マクドナルド宛ての手紙に「昨夜焼津に到着、燐光の光る海で一泳ぎしました (took a swim in *a phosphorescent sea*)」と記し(ibid., 92; Bisland vol. 2, 447)、同年に発表した「焼津にて」の第 2 部で、盆の送り火を追って暗い夜の海に泳ぎ出す場面を描く。「次の瞬間、その灯のところへ泳いでいってみようという考えが浮かんだ。わたしは浜辺に着物を脱ぎ捨てると、海に飛び込んだ。海はおだやかで、美しく燐光を発している (The sea was calm and beautifully *phosphorescent*)。抜き手を切るごとに、黄色に火の流れは燃え立った」(362; 上田訳 372)。

さらに第 3 部では、この海岸での「海の魂が耳立てる (The Sea has a soul and hears)」という諺、つまり「海が恐くなったときには恐いということを決して口にするな。もし恐いと言ったら、波が突然高くなる」という言い伝えを語る場面で、「[海が生き物であるかのような]こういう原始的な空想は昼間の光の下でよりも暗闇の中での方が一層強く掻き立てられるかもしれない。燐光で青く明るい夜に (on nights of *phosphorescence*) 海水のきらめき又くすぶる明暗がどんなに生き生きと見えることか」(366-37; 森訳 45-46)、と続く。

ここでいう「燐光」とは、「微生物(プランクトン)である夜光虫が発する光」であり、「当時は、焼津の海にも沢山夜光虫がいた」(村松 91)。加えて、ハーンにはもう１点、夜光る海を扱った小品 "Noctilucae"「夜光るもの」(*Shadowings* [1900] 所収) があり、「いのち尽きようとする一匹の夜光虫の束の間のきらめき」を前に、「自分も燐光の一点であることを知った (I knew

myself also a *phosphor-point*)」(140; 森訳 303-4)。「焼津にて」と「夜光るもの」は、特に「海と作家ハーン」(村松 107-21) を論じる際には必ず引用される2点である。

上記のエドワード・トマスによるハーン論においても、その冒頭近くで、「焼津にて」のこの箇所、送り火の漂う海へ泳ぎ出した語り手が「我々自身、この灯籠のようなものではないのだろうか。より深く、よりほの暗い海に送り出され、絶えずお互いが次第に遠く離れながら、やがて訪れる、避けることのできない消滅に向かって流れて行くのである」と語る場面が引用されている (363; Thomas 28; 飯田訳 17-18)。

ここで、コンラッドが "The Secret Sharer" を発表した1910年はトマスがハーン論を書いていた時期と一致している、という関連づけを試みる意図は毛頭ない。ただ、ハーンとコンラッドのこの2つのテクストを互いに関連づける共通項は何もないのであろうか。ハーンは冥界を思わせる暗い夜の海で光を発する一匹の夜光虫に自らを喩え、そこから「無意識の海」(村松 96) へと瞑想を展開していった。コンラッドの物語中の語り手は、シャム湾の凪の風景の中に自分の「分身」を一つの燐光として逃した。少なくとも、ここでは、世紀転換期に遠隔地での経験、印象、思索を英語文学へフィードバックすることを試みた二人の優れた storytellers のあいだで、印象記・随想というジャンルと短篇小説というジャンルとが、限りなく接近していることは確かである。

注

1. G. M. Gould によるハーン伝 *Concerning Lafcadio Hearn* (Philadelphia, 1908) は根拠のない誹謗を含んでいるとして悪評高いが、巻末の Bibliography はハーンの各著作について1908年時点での出版・書評掲載情報を詳細に記しであり、有用である。
2. この喩えは、*Spectator* 紙 (1895.10.19) での書評による (Sherry 61)。
3. アメリカの有力出版社ハーパーの *Harper's Magazine* は、アメリカ時代のハーンにとって1887-89年の主要な作品発表の場となり、来日の契機を作った縁があるが、ハーンは来日してすぐに契約上の不満からハーパー社との縁を断つ。コンラッドが「当時アメリカで最も広く読者を集めていた」この雑誌を発表の場とするようになったのは、1906年の "An Anarchist" と "The Informer" からであり、同誌は "The

Secret Sharer" などの主要短篇の掲載誌となった他、*The Mirror of the Sea* (1905), *The Secret Agent* (1907), *Under Western Eyes* (1911), *A Personal Record* (1912) といった 1905-12 年の主要単行本のアメリカ版はこのハーパー社による出版であった [Reid 66]。つまり、ハーパー社および *Harper's Magazine* において、ハーンとコンラッドに「共存」の時期はないが、すれ違う関係ではあった。

引用文献

Bisland, Elizabeth. *Lafcadio Hearn: Life and Letters*. 2 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1907.

Conrad, Joseph. *The Collected Letters of Joseph Conrad*, Vol. 4, ed. F. Karl and L. Davies. Cambridge University Press, 1990.

———. "The Secret Sharer." In *'Twixt Land and Sea*. 1912. London: Dent, 1947. 小池滋訳「秘密の共有者」『コンラッド中短篇小説集 3』. 人文書院, 1983.

Hearn, Lafcadio. *A History of English Literature in a Series of Lectures*. 2 vols. Tokyo: Hokuseido Press, 1927.

———. "At Yaidzu." In *In Ghostly Japan*. 1899. The Writings of Lafcadio Hearn, vol. 9. Boston: Houghton Mifflin, 1923. 上田和夫訳「焼津にて」『小泉八雲集』. 新潮文庫, 1975; 森亮訳「焼津にて」『小泉八雲作品集 2』. 河出書房新社, 1977.

———. "Noctilucae." In *Shadowings*. 1900. The Writings of Lafcadio Hearn, vol. 10. Boston: Houghton Mifflin, 1923. 森亮訳「夜光るもの」『小泉八雲作品集 2』.

Okuda, Yoko. "East Meets West: Tadaichi Hidaka's 'A Visit to Cornad'." *The Conradian* 23, no. 2 (1998): 73-87.

Reid, S. W. "American Markets, Serials, and Conrad's Career." *The Conradian* 28, no. 1 (2003): 57-99.

Sherry, Norman, ed. *Conrad: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1973.

Smet, Joseph de. *Lafcadio Hearn: l'home et l'oeuvre*. Paris: Mercure de France, 1911. ジョゼフ・ド・スメ著 西村六郎訳『ラフカディオ・ハーン—その人と作品』. 恒文社, 1990.

Thomas, Edward. *Lafcadio Hearn*. London: Constable; Boston: Houghton Mifflin, 1912.

飯田 操. 『エドワード・トマス「ラフカディオ・ハーン」— 翻訳と研究』. 広島: 文化評論出版, 1990.

日高只一. 「コンラッド訪問記」『英米文藝印象記』. 新潮社, 1924. 180-206.

関田かをる.『小泉八雲と早稲田大学』. 恒文社, 1999.
平川祐弘・牧野陽子編.『講座 小泉八雲』 I, II. 新曜社, 2009.
平川祐弘監修.『小泉八雲事典』. 恒文社, 2000.
村松眞一.『霊魂の探究者小泉八雲 — 焼津滞在とその作品』. 静岡新聞社, 1994.
森 亮.『小泉八雲の文学』. 恒文社, 1980.

（しだら　やすこ　武蔵大学非常勤講師）